

本日の聖書箇所は、キリスト教の礼拝に出席し始めたとき、多くの方が違和感を抱かれた主イエスの言葉だと思います。多分、今でも、多くの信徒の方は理解しづらいと感じているのではないでしょうか。日本人は個人主義であるよりは家族主義を第一にすること、つまりは家族を大切にしているからです。父、母、兄弟姉妹、そういう血のつながりのある人が非常に大切だからです。ところが、本日のルカ福音書では、父とか母とか、妻とか、兄弟とか姉妹などの、この世で最も大切な人たちまでをも『憎まないなら』（26節）と、『わたしの弟子ではありえない』（27節）と主イエスは言っているのです。

文化庁が世界統一家庭連合（旧統一協会）に質問権を行使したにもかかわらず、誠意ある回答をしないために罰金を科すようですが、世界統一家庭連合は、この日本人の家庭を大切にすることをうまく利用して、先祖解怨という事で何千万円、何億円もの献金をさせて、多くの家庭を破壊しました。40年前には、壺や印鑑を法外な金額で購入させて、先祖からの呪いを払しょくできるという詐欺を全国で引き起こしていました。それらの詐欺行為は日本人の家族を大切にすることを付け込んだ悪質な行為でした。このように、旧統一協会が日本を舞台に暗躍することができた背景には、日本人が家族や家系を大切にすることを思考が利用されたのです。

イエスがどうして、このような言い方をしたのかを考えてみましょう。まず、イエスは福音宣教のために、父や母を捨てられた方だということです。マタイ福音書8章20節には『狐には穴1
があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない』というイエスの言葉が残されています。いわば、イエスは仏教的に言えば「出家」していたのでしょうか。弟子であるペトロの家にはときどき泊まっていたらしいことがわかっていますが、基本的には無宿者として暮らしていたのでしょうか。そのことがわかるエピソードがマタイ12章46節〜50節にあります。

イエスが群衆に対して話しておられたとき、ある人が『御覧なさい。母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます』と言うのです。話があるから呼んでいるというのは、家に帰るように迎えに来ているよ、という意味です。イエスのような生き方をしていれば、宗教的権力者と政治的権力者に逆らって、支配の秩序を壊すような活動をしていることになりませぬので、必ずそのうちに殺されてしまうと、家族であれば心配することでしょう。だから、母親や兄弟たちが心配して迎えに来たのです。

そういう激しい生活はすぐ止めて実家に戻って一介の大工としておとなしく生きてほしいと呼び戻しに来たのでしょうか。ところが、そのとき、イエスは言うのです。『わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか』と発言し、弟子たちの方を指して言うのです。『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また、母である』と言うのです。

この言葉からわかることは、イエスにとつて何が大切なことであるかということと、「天の父の御心を行う」ことです。つまり、他人の僕として、他人の足を洗うような生き方をする人が、わたしの母であり、わたしの兄弟姉妹であるということなのです。

このように、ただ血のつながりによる愛着だけの関係になっているならば、わたしの母でもなければ、わたしの兄弟姉妹でもないのです。だから、父とか母とか兄弟姉妹などの血族への愛着やつながりもまた、イエスが言われた「相手の僕になって、相手の足を洗いなさい」という関係にならなければならぬということなのです。

このような生き方が基本にあつて、初めて「父母や兄弟姉妹の関係性も本物になる」ということをイエスは言いたかつたのではないか。本日の聖書箇所であるルカ福音書14章33節でイエスは「だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない」と言っているのですが、この33節のなかで「一切を捨てる」というショッキングな言葉が記憶に残りやすいために、キリスト教信仰は厳しい生き方を勧めると受け止めてしまうのではないでしょうか。

けれども、これまで見てきたように、他者との出会いによってどのような関係性を持つかといえば、相手の僕になって、相手の足を洗うような関係性を築いていくことをイエスは求めていることがわかるのです。僕というと、奴隷になることではなく、僕としての立ち位置に立つて相手との関係性を築くという姿勢のことです。

33節で『自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない』とイエスは言っていますが、この言葉は、イエスに倣った生き方をするという意味でしょう。イエス自身が自分の持ち物を一切捨てて、自分の家も捨てた人ですから、この言葉はイエスに倣う生き方のことです。一切を捨てるということは、自分の名誉や社会的地位、財産、その他の外的な宝物だけでなく、自分自身に執着することも含まれているでしょう。

2

14章26節でも『自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない』言われており、33節とほぼ同じことが言われています。こうして、肉親への愛情とか自身自身の命への執着までも捨ててしまつて、何をするのかというと、「他人の足を洗う」ということに象徴されるように、他者との関係によって明らかにされる自分自身の小さくて狭い自我が崩されることを指した言葉であろうことが容易にわかります。つまり、自分の自我に執着しない生き方をする事によって、本当の自我に気づかされるのです。この気づきによって、わたしたち人間は神に生かされた命を持っている者同士として出会うことができ、それによって生きとし生けるものすべてが神の御心の中に生かされた尊いものであることを知るに至るのです。

ですから、イエスが言われた「一切を捨てる」という言葉を文字通りに実際の生活に当てはめて、自分の家族を捨てたり、自分の生活に必要なものを物理的に一切捨てることだと単純に解釈するのではなくて、神の御旨に生かされた命に生きることが、この「一切を捨てる」という言葉に凝縮されているのです。

私たちは命あるすべてのものが、神による創造の業によって、日々新たに生かされている命をいただいで生きています。この恵みの事実立たなければ、誰も、この命を十分に生きぬくことができません。「一切を捨てる」とは、神に生かされている尊い命に気づくことで、その命を他者との交わりの中で生かし切ることだということを心に留めて、この一週も神と共に生きていきたいと思えます。